

日本での男女不平等問題の歴史、現状、そして今後の展望
Japan's past, present, and future regarding gender discrimination

Stella Yuan
袁逸欣

82-372 Advanced Japanese 2

1. はじめに

「ね、日本の男ってさ、女に変なところで要求高すぎじゃない？」気まぐれなのか、放課後の帰り道に、夏休みに東京大学の研究所で働いた女性友達がこう呟いた。

「え、なぜ？」

「だってさ、食事の時ちょっと服を汚したら、ラボのメンバー達にだらしないって言われたし、座る時も足を少しだけ開いたのに指摘されたもんね。」

「そりゃそうだろう、日本人のそういう何事にも気を配るとこって惹くよな。実験や勉強だってそうだろう？どう、厳しかった？」

「いいえ、これが一番不思議なのよ。仕事があまりうまく進んでないのに、教授がちつとも怒らなかつたもん。ラボの男全員が叱られて罰を受けたのに、私だけが何もされなかつたよね。」ちょっと困惑した顔の友達は語り続けた「実験が捗らないことは許してくれるのに、マナーと女らしさには随分厳しいよね…」

「へ…」これはびっくりした。だが、あの時の私はこの状況を「女性に対して有利だ」としか認識しなかつたのだ。

「私、絶対日本の会社で就職しないもん。」希望の就職先を尋ねられたら、高校時代のクラスメートは一瞬の躊躇もなく、はっきり日本をリストから外した「どれだけ仕事を続けたいとしても、結婚したら育児のために会社を辞めるしかないの。そんなの嫌だ。」

「日本の女の子ってかわいそうだわ。なんと、不本意ながらも、夫と一緒に暮らさねばならないのよ。子供のために家庭を維持するしかないんだもん。しかし、一旦子供が自立して、夫が退職したら、すぐでも離婚して自由になる奥さん達もよくいると聞いたわ。」
小学校から大学まで、昼休みの時間によく聞く話題の一つだ。

「うわっ、なにそれ、怖っ！」

「そんなの嘘って決まってるだろう。」

「でもうちの親もそう言ってたわ…」

何歳になっても、この話題に引きつけられる若者達はたくさんいる。決して絶えることもなく、この噂はいつも誰かに流され、みんなに討論され、批判され、そして最後さらに世間に広まる。

そう、よく聞くのだ、こういう話。日本での性差別は友達や家族からだけではなく、いろんな国のテレビのニュースでも多く言われていて、もはやまるで特別な社会文化現象になったみたいだ。最初は根拠のない伝説だと思った幾つの流言も、ネットで調べたら実際存在していると確認した。それとともに、私の友達が違和感を感じた理由もついに明らかになった。まず、日本では、無意識のうちに、性差別意識が形作られるような教育をしていることが多い。女の子は幼少期から女らしさ、男の子は男らしさを身に付けるべきだと教えられる。学校でも職場でも男性と比べて、女性は自分の能力や知識より、女としてのアイデンティティが社会で重視されている。結果として、男性と女性を評価する標準は非常に異なっているため、男性でも女性でも不満が生じやすいことになる[1]。次に、現状では働く女性の約6割が第一子出産を機に離職している。女性の育児への会社側の配慮が足りていなさそうだ[2]。最後に、仕事一筋、無趣味だった夫が定年退職したら、自分が1日中こき使われる可能性が高いと判断した妻は、大変なストレスを感じるようになることが多い。退職後に離婚するのは、妻が主人在宅ストレス症候群[3]を避ける方法でもあるが、子供の自立と結婚をきっかけに、「自分も第二の人生を体験したい」、「自分の人生をようやく楽しめる」という考えを元に離婚する男性と女性も多いらしい[4]。

さらに、FORBES 調査によると、日本では67%の女性が「自分の夢や望みを完全に達成するための自由や、男性に対する完全な平等を得ていない」と答えた[5]。不満を抱く女性の予想以上の割合とこの前の調査から得た資料はとても興味深いと思ったので、日本の

男女差別問題をもっと深く探ることにした。すると、私の考え方がいかにも浅はかで、無意識に女性としての偏見を持っていることに気がついた。実際のところ、女性だけではなく、男性側にも性別による不公平な扱いが多いことが分かった。さらに、男女不平等の裏に歴史、教育、社会環境、民族価値観など様々な要因が隠れているため、客観的な結論に辿り着くには、男性側の意見と考えを含めて、多様な視点で全面的に調査する必要がある。では、日本での男女不平等問題の原因、歴史、そして今後の展望はどうか、詳しい調査の結果をご覧ください。

2．日本での男女不平等問題

2．1．男女の地位の平等感はどうか

初めに、男性と女性が性差別の現状をどうかを覗こう。男女の不公平感の実態を調べるために、オウチーノ総研は2015年7月17日から7月22日まで、20～69歳の男女864名を対象に、インターネットによるアンケート調査を行った。調査によると、男性といい女性といい、各々の性別による「生きやすさ」と「生きにくさ」を実感することが多い。[6]

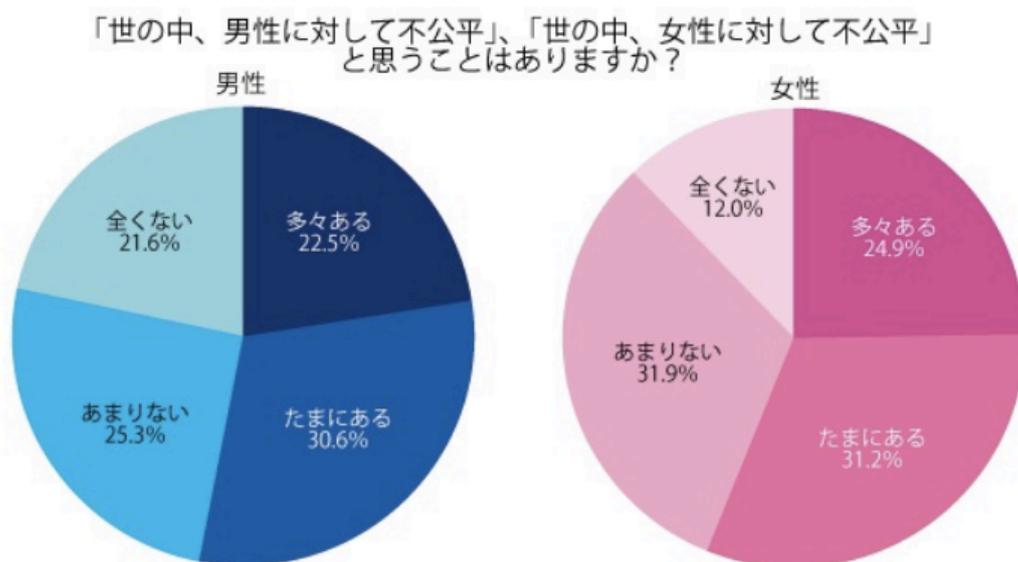


図1-1．オウチーノ総研「男女の不公平感に関する実態調査」より作成 [6]

まず、男性と女性それぞれに「世の中で、（男性回答者の場合）男性 / （女性回答者の場合）女性に対して不公平と思うことはありますか？」という質問をした。結果、53.1%の男性が「男性が不公平な扱いをされている」と思っており、56.1%の女性が「世の中が女性に対して不公平」と思っていることが分かった（図1-1）。異性と比べて不公平だと感じている人の割合は、男女で大差がないことはかなり予想外だ。[6]

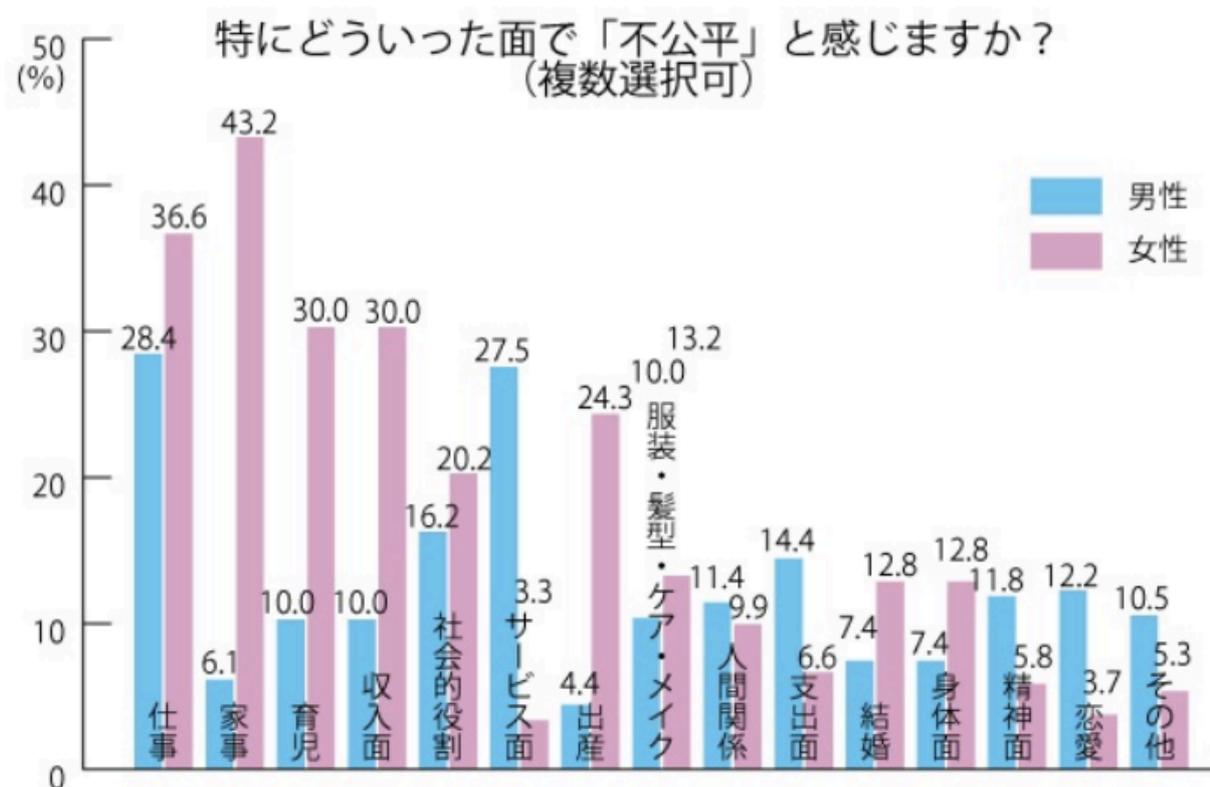


図1-2 . オウチーノ総研「男女の不公平感に関する実態調査」より作成 [6]

次に、「特にどういった面で不公平と感じますか？」という質問に対して、男性の答えが最も多かったのが「仕事」の28.4%、「サービス面」の27.5%、そして「社会的役割」の16.2%だった。一方女性の場合、最も不公平と思ったのは「家事」の43.2%、「仕事」の36.6%、そして「育児」と「収入面」の30%だった（図1-2）。面白いことに、観点が異なるが、男性も女性も「仕事」上の性差別に不満がある。男性側は「きつい仕事を任

されるから」や、「要求される責任が重いから」などで不平を感じた。一方女性は、「能力ややる気があっても認めてもらえず、昇進の機会が少ないから」や、「同じ仕事をしていても、男性の方が給料がいいから」や、そして「女性だとなめられるから」などの理由を述べた。興味深いことに、例え女性が出産と育児のせいで仕事のブランクが発生して、それによって男性が管理職になる機会が増えたとしても、それは女性から見れば昇進の機会減少と映り、反対に男性から見れば重労働と映ることになる。いずれにしても、男女ともに異性と比べて仕事上の不公平を感じてしまう。「働く環境を整えるべきではないだろうか」という提案がありながら、具体的にどんな方針を採用するかは難題だと思う。職場の性差別については、またセクション2.3で詳しく説明する。[6]

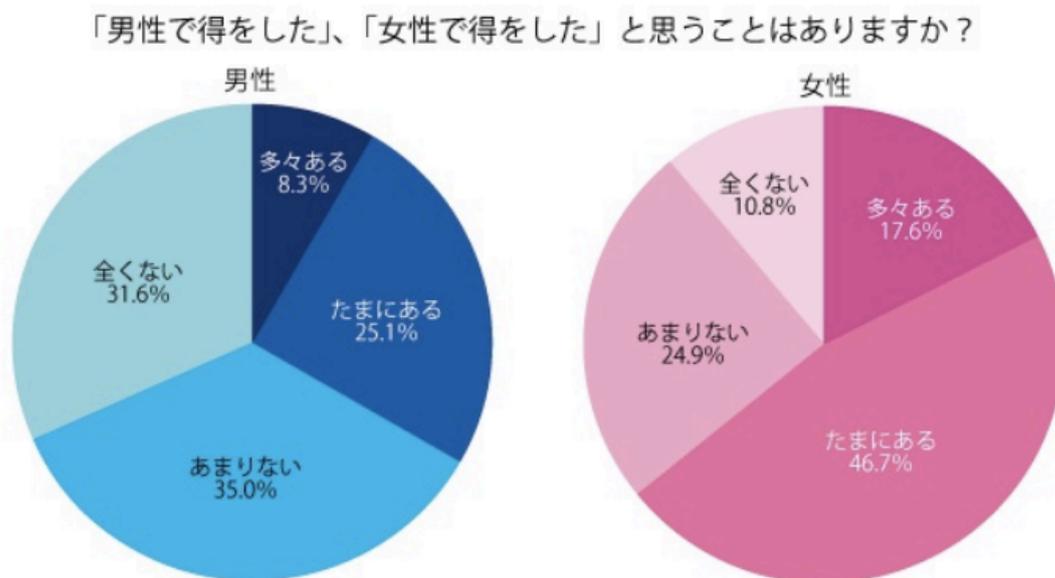


図1-3 . オウチーノ総研「男女の不公平感に関する実態調査」より作成 [6]

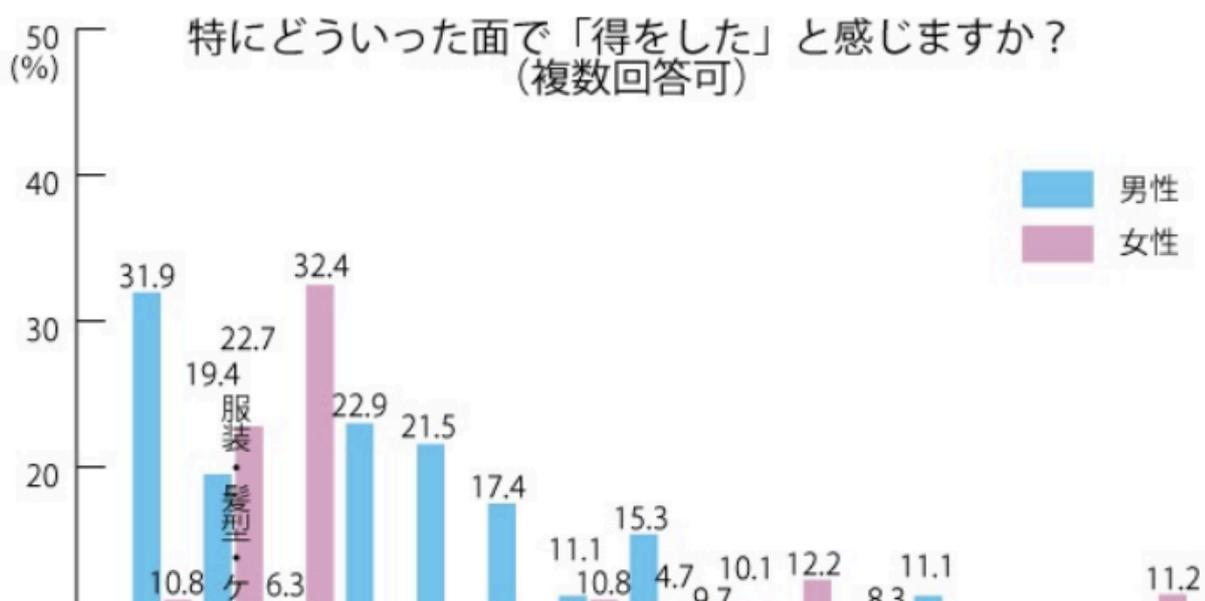


図 1-4 . オウチーノ総研「男女の不公平感に関する実態調査」より作成 [6]

続いては、「(男性回答者の場合)男性で / (女性回答者の場合)女性で得をしたと思うことはありませんか?」と質問した。自分が得をしていると思う女性が 64.3%を占めているが、男として得をしたと思う男性の割合は僅か 33.4%だった(図 1-3)。さらに「特にどういった面で得をしたと感じますか」の回答によると、男性が最も多く選択したのは「仕事」で 31.9%、次に「身体面」が 22.9%、そして「収入面」が 21.5%だった。一方女性が多く選んだのは「サービス面」の 32.4%、「衣装、髪型、ケア、メイク」の 22.7%、そして「支出面」の 12.2%だった(図 1-4)。前にも示されたように、「家事」と「育児」は女性の間不公平だと感じている人が多い一方で(図 1-2)、男性は得をしていると自覚している人が少ない。逆に、多くの男性が不満を表した「サービス面」だが、女性は自分が得をしていることをよく意識している。または女性が不平と感じた「収入面」について、男性は自分が女性より有利なことを察知している。そうして見ると、家事や育児に関して、『女性がやるのが当然だ』という考え方を持つ男性が多いのだろうか。それとも、男性は手伝いをしたけど、女性からは量が十分でない判断されてしまっているのだろうか。家庭内での男女差別については、またセクション 2 . 3 で詳しく分析する。[6]

2 . 2 . 歴史上の性差別はどうか

では、日本における男女の社会地位差異はいつに遡れるのだろうか、その長い歴史を見てみよう。奈良・平安時代には、女性の家族内の地位は男性より高かった。当時の日本社会は母系制社会であるため、子供の養育といい、結婚といい、女性は大きな発言権を持つ

ていた。若い女性が結婚を決める時にも、自分の意思だけではなく、母親の了承も得ざるを得ないが、その一方父親はその決定権を持つことすらなかったようだ。その上、結婚した後、男性の方が女性の家に通うことになったので、家庭の中心にあるのは女性ということが明らかだ。おまけに、女性は家の名目と財産の全てを受け継ぐ権利があったらしい。面白いことに、古代の家庭観念は至って薄いだと考えられるのだろう。男性は同時に複数の女性と結婚することができるが、昼間に女性も男性もそれぞれの家で農業やその他の仕事をしていたため、一つ屋根の下に暮らせるのが夜僅かな数時間だけだった。その生活の独立性と当時の農業社会を基にして、女性の家庭内の地位は決して夫より劣らなかった。さらに、古代において巫女は神の声を聞くことができると思われていたため、女性の宗教的地位も随分高かったらしい。しかし、社会的地位について、女性はやはり男性に敵わなかった。大臣や朝廷の役職を務めていたのは全て男性だったし、社会的地位も父親から息子へと受け継がる形になったようだ。これにより、古代から女性の社会進出は男性より少なかったのだろう。[8]

続く鎌倉時代から室町時代までの女性は、依然と宗教的に神に近い神格を持っていると思われていたが、武士という戦闘集団の成立により、女性が男性の家に入るという結婚形式が成立した。従って、家を守り、領地を管理し、使用人をまとめることなどは妻の役割となった。要するに、男性ではなく女性の方が結婚相手の家に入ることで、家庭内における女性の力が弱まった。けれどそれと同時に、女性の社会進出が増えたらしい。この時期には武士の鎌倉幕府でも、朝廷の貴族の間でも、女性が政治の実権を握る姿が見られるようになった。加えて、商売での女性の役割も重要だったらしい。例としては、中国から輸入した蚕を育て、絹糸をとり、絹織物を作り、そして街の市場へ持って行き、売って儲けることは、女性だけの仕事であり、また権利でもあった。社会の中で活躍する女性の姿は、いろんな絵などにも描き残されているようだ。男に対しても女に対しても、この時期はまさしく古代から現代への架け橋だった。[8]

その後訪れたのは、「男尊女卑の風が強い」と言われる江戸時代だった。江戸と言え、ば、「吉原 | 遊女」、「三下り半」、「女性が虐げられている」などの印象が強い。大河ドラマによく出る「三下り半」という3行半に書く離縁状、女性はそのたった一枚の紙切れで簡単に離縁されると言う。おまけに、この「三下り半」は離婚届けであって女性への

再婚許可でもあった。「貞女二夫に見えず」という貞操観念が強まった江戸時代には、夫から差し出した「三下り半」がないと女性は自らの意志に関わらず、離婚を申し出ることすらできなかった。極端な場合は、戦争未亡人が再婚することも出来ず、子供を抱えて辛抱するという話もあった[8]。以上の家制度から見ると、女性が与えられた選択肢は極めて限られていた上に、家庭内の地位も低かったらしい。

ところが、堅苦しい結婚・離婚制度は確実に存在していたとは言え、女性全員が惨めな生活を送っていたのだろうか？ドラマやメデイヤが放送したのは紛れもなく当時の社会の実態なんだろうか？資料を調べたら、これについての反論もあったようだ。まず、江戸時代の男性は自分の女房が気に入らなくなったとしても、軽々しく追い出すことが出来ないのだ。男性が三下り半を突き付けても、それに対して女性の方が「返り一札」と言う受領書を書かなければ離婚は成立しなかったのだ。もし男性がこの返り一札を受け取らずに別の女性と結婚したりしたら、重婚の罪で追放刑となるのだった[12]。しかも、結婚の際女性は男性のために持参金を用意したから、もし夫が離婚を申し込んだら、法律によると持参金は全部妻に返すべきだったのだ。と見ると、確かに江戸時代の女性は家族内の主導権を握っていないが、それでも社会は最低限、女性の意思を尊重したわけだ。

おまけに、「三くだり半と縁切寺」を書いた高木さんによると、武士階級にあつては、妻は持参金を背景に強い発言力を持って、離婚を厭わなかった。江戸時代の武士階級の離婚率は10パーセントという高率で、しかも女性の再婚率は50パーセントを超えていた。江戸時代の離縁状は妻にとっても夫にとっても法律上の要件に過ぎないから、建前として使われてただけで、家庭内の実態とは全く無関係だ。夫から追い出されたより、夫婦双方での協議離婚の方が主流だった、と高木さんは述べる[10]。さらに、「武士の娘」を書いた杉本さんによると、妻は家族全体の幸福に責任を持つように教育されていたため、自ら判断して一家の支出を司っている。夫の働きにより、妻は銀行家または財務大臣で、財布を握っているということは強い権力を持っているということだ。江戸時代の頃の女性は前の時代と比べて相続権は無くなったが、独自の財産を持って、加えて家を守るという責任または誇りを持つ以上、女性の地位が低いはずがない、と杉本さんは言う[11]。いずれにしろ、女性の家庭内の地位は確かに前の時代と比べて随分下がったが、メデイヤに宣伝されたものとは違うようだ。

お次は、江戸時代の女性の社会地位をまとめよう。ご存知の通り、江戸時代には身分制度があり、大きな格差が存在した。幕府が日本を統治し、武士に大きな力を与えた。それ故に、武士は頂点に立っていて、商業従事者がその次で、最後にあるのは農業従事者と工業従事者、という様な順番で身分が固定されていた[13]。各階級が望んだ役割分担はかなり違った為、江戸時代の男女関係を一概に論じるのは不適切と思う。前にも述べたように、武士階級での男女の役割は三つの階級の中でも一番異なっているとも言える。なぜなら、武士も家柄によって決まる身分制度の一つだったが、たとえ武士の家系に生まれても女性は武士となることは出来ず、生まれた時点で男性より地位が劣っているからだ[9]。そもそも女性の体力と武力は男性に劣る為、武士としての役目を果たせるわけがなかった。それによって武士階級では、男性は一門の誇りと国の威信をかけて外で戦って、それと同時に、女性は主人の武士道精神を貫くために家の中で家族の誇りを守ることになった。武士階級の女性はほとんど社会進出しないで、読み書きの能力を身に付け、琴や茶道を学び、優雅で誠実な奥さんになることを目指した。[14]

次に、商家では誇りや規定より、社会資源を最大限に活用し、商売を成功させることが重要だった。商家の女性は、武家ほど重い家族責任を負わなくて済むが、一族におけるそれなりの期待を背負うこともあった。男性はいかに努力しても商人から武士への昇進は不可能に近いが、女性はそういう機会があった。武家の使用人になれば社会地位が上がることになる、それを狙って、もし商家に美しい娘がいたら、両親はその娘に昇進の希望を託すことが多かった。経済力のある商人は学費を払って自分の娘に書法や三味線の授業を受けさせて、将来武家に仕えられるように育てた。もちろん、全ての商人に美貌を持つ娘がいるわけではないので、昇進を目指したのはほんの一部の商人でしかなかった。普通の商家では、男女に関わらず多くの子供が寺子屋に通って、読み書きと算数を身に付けた。ある程度まともな教育を受けた為、成人した女性は家での管理役であり、夫の補助役でもあった。家で留守番するだけでなく、夫や父の側で働いて家族企業を支えることも多かったらしい。[14]

最後に、独立性が高い農家では、努力して農業を営むことが重要だった。奈良時代と似たように、家庭内でも仕事上でも男女はともに力を合わせた。女性は絹織物の生産と販売に集中して、一方で男性は柴狩りと木炭販売に励んだ。[14]

三つの身分を比較すると面白いことに気づいた。江戸時代では、家族の身分が高ければ高いほど、男女間での分担と権限がはっきりしていた。つまり、農家の男女関係は奈良・平安時代と、商人家の男女関係は鎌倉時代と似ている。他方、武家は男女の社会的地位の違いといい家族内での躰といい、江戸時代は昔のどの時代とも大きく違っていた。体力と武力を使う侍の世界は男の世界とも言える。武力を優先したことによって、世の中での女性の活動と進路は限られていた。言い換えると、国と社会が重視しているものは男によってしか与えられないので、たとえ女性がいかなる能力と魅力を持っていても、時代の求めに応じないならば社会地位は自然と下がってしまうということだ。

これからは私なりの考えだが、時代とともに男女役割が変化した原因を述べたいと思う。まず、古代史から始めると、女性が家族の世話を焼き育児をするのは生物としての本能だと思う。女性が男性より家事と育児に向いているのは事実だ。動物の世界では、極めて少ない一部の動物を除き（ペンギンやその他）、子供を育てるのはほぼ全部雌の方だ。日本だけではなく、古代の世界の全ての文化と地域で人間は動物におけるこの原始的な生活パターンに従っていた。女性は果物収集と洗濯、男性は魚狩りと柴刈り、分野は少し違っていても男女はともに働いた。どっちが欠けてももう片方は生きられない、だからこそ両方の仕事は平等だった。さらに動物と同じように、家族の中心にあったのは育児に対して経験豊富な女性であって、その一方村や地方を導いて統治するのは領地意識が高い男性だった。どっちかが偉いとかどっちかが劣っているではなく、両方が背負った責任は表と裏みたいにお互いを補完していた。これにより、奈良・平安時代では、家族内と社会での男女の地位はほぼ平等だった。しかし、時代とともに経済の多様化が進んで、この原始的な社会を変えてしまった。生活の範囲が広がり、情報量が増え、より多くの新しい知識と技術が日常生活に溶け込んだ。家にこもって家計を管理する女性といろんなところを頻繁に出入りする男性、両方を比べたらやはり男性の方が社会での最新情報に詳しいのではないかと私は思う。もちろん、良好な隣人関係を築けた女性もいろんな情報交換をしたかもしれないが、家庭を守るには時間と精力がかかるので、最初からもう男性に負けていると思う。中世にも優れた女性は何人もいたが、一般的に言えば、結局男性の方が知識も技術も圧倒的に多いので、社会進出も女性より多かった。昔は夫と妻、どっちの力が欠けても経済的に苦しくなるが、中世の幕開けの鎌倉時代には、この対等な関係は崩れていた。

夫の稼ぎは時折妻の何倍でもあった以上、妻の仕事は重要とされていなかったのではないだろうか。当然先にも書いたように、鎌倉時代では女性の参加によって商売が盛んでいたが、男性と比べたら当てにもならないと私は思う。経済力があることは主導権を握ることとも言える、従って社会的にも家庭内でも女性の地位は確かに古代と比べて下がっていた。この現象は江戸時代の武士階級に一番明らかだと思う。武士の社会が求めるものは男性しか与えられないので、女性が表舞台で活躍する例は少ない。武家の女性の特徴は「家庭的なこと」と「勇敢さ」だった。家庭的と言え、武士が主人を守るのと同じように、女性は自己否定しながら、自分の全てをかけて家族を守った。武家の女性が受けた教育は決して少ないわけではなかったが、それらは社会に役立つための教えではなく、女性が客を接待する側の担当者として一家の恥を晒さないように教われていた。音楽、和歌、踊り、茶道、文学、それらを全部身につけるには女性の一生もかかるのだった。さらに、武士階級の女性たちは儒教と仏教に男尊女卑の価値観を押し付けられていて、男の命令ならなんでも従うべきというように教えられていた。武家女性の「勇敢さ」というのは、成人した女性は女性用の武芸を学び、短刀を操るよう訓練されたことだ。いざとなったら、汚れないように自分を守る、または自殺する為に武芸を身に付けた[15]。それらによって、武士の妻の存在意義は、自己を犠牲にしても家の誇りを守ることだったらしい。逆に、商業階級と農業階級の女性の役割はそこまで極端的ではなかったし、夫とともに外で働くことも普通だった。それは、社会がそれぞれの階級に期待しているものが違うからではないだろうか。武士階級では、女性は武力と体力を使う仕事を果たさないからこそ、家の中に閉じこめられる形になったのではだろうか。

私から見ると、男女の役割分担は大きく社会の期待に左右されている。農業社会から商業または工業社会への転換によって、女性への期待は下がっていた。最初は大きな差がなかったかもしれないが、社会が女性に期待していないため、男性に比べ女性に与える情報や知識、そして社会資源なども減り続けた。女性はこの不平等によって、無論仕事では男性に敵わなかった。それが「女性は社会に向いていない」という世間の偏見を生み出し、女性への投資と支持はさらに減った。この悪循環が長く続き、やがて女性と男性の間には社会での大きな差が出てしまったのだ。

参考文献

- [1] 山本優奈 (2015) 「教育における社会的性差の研究」 <http://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2015/14/a1160492.pdf>
- [2] 総合職の女性は、なぜ会社を辞めてしまうのか。「育休世代」の本音とジレンマ—中野円佳さんに聞く / ライフスタイル / HUFFPOST JAPAN https://www.huffingtonpost.jp/2015/04/12/ikukyu-sedai-madoka-nakano_n_7048852.html
- [3] 主人在宅ストレス症候群 / ウィキピディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%BB%E4%BA%BA%E5%9C%A8%E5%AE%85%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AC%E3%82%B9%E7%97%87%E5%80%99%E7%BE%A4>
- [4] 定年退職後に離婚する夫婦が多い？理由と対処法 <http://離婚回避.net/rikonsinai911>
- [5] 不平等感じる女性の割合、日本は2位、世界24か国調査 / FORBES <https://forbesjapan.com/articles/detail/15506>
- [6] 男女の「不公平感」に関する実態調査 / PRITIMES <https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000023.000014097.html>
- [7] 日本の働く女性の七割が「男女の不平等」を実感！世界の男女格差ランキングも下位レベル / ニュース / 女の転職 <https://woman.type.jp/wt/feature/2111>
- [8] シヤジニナ・ハンナ 「日本女性の社会地位に関する歴史的研究」 http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/38811/20160119101816722020/ReportJTP_23_56.pdf
- [9] 日本における男尊女卑の考え方の歴史 / Mayonez <https://mayonez.jp/topic/3877>
- [10] 江戸時代の結婚、制度から見た男女の地位 <http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=158029>
- [11] 武士の時代、女性の地位は低かったのか http://d.hatena.ne.jp/jitaro_maru/20110123/1295765493
- [12] 三下り半を書いてもそう簡単には離婚は出来ませんでした <http://www.edojidai.info/uso-hontou/mikudarihann.html>
- [13] 江戸時代の身分制度である「士農工商」の序列は嘘だった！？ <http://www.edojidai.info/mibunseido.html>
- [14] Gender Expectations of Edo Period Japan / Social Customs / Japan Powered <https://www.japanpowered.com/japan-culture/gender-expectations-of-edo-period-japan>
- [15] 江戸時代武家女徳的養成教育之概述 (中国語) <https://books.google.com/books?id=3kRoDAAAQBAJ&pg=PA176&lpg=PA176&dq=%E6%AD%A6%E5%A3%AB%E3%80%80%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%80%80%E6%95%99%E8%82%B2&source=bl&ots=NH42I9L27R&sig=GcAnQP1FqIGa3tfcfxvaTAWHUMg&hl=en&sa=X&ved=0ahUKEwjy7aG5bDaAhVBPN8KHam4BuUQ6AEILDAB#v=onepage&q=%E6%AD%A6%E5%A3%AB%E3%80%80%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%80%80%E6%95%99%E8%82%B2&f=false>
- [16] 男女平等に関する世論調査 / 総理府内閣総理大臣官房広報室 / 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19921101001/t19921101001.html
- [17] 平野敏政 (2011) 「女性をめぐる社会的環境の歴史的展開-2」 帝京社会学第24号 <https://apps.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/syakai24-01.pdf>

[18] 安田宏樹 「管理職への昇進希望に関する男女間差異」

http://jww.iss.u-tokyo.ac.jp/jss/pdf/jss6401_134154.pdf

仕う奉る